

第 16 回 歯科衛生研究会

平成 14 年 2 月

講演抄録集

日 時 / 平成 14 年 2 月 27 日 (水) 午後 5 時 30 分

会 場 / 日本歯科大学新潟歯学部アイヴィホール

日本歯科大学新潟短期大学

歯科衛生研究会

会 長	石川富士郎
委 員 長	高橋正志
企画運営委員	阿部邦昭、宮崎晶子、三富純子、高山夕見子
庶務渉外委員	佐藤治美、片野志保、渡辺祥代、田辺智子
事務担当委員	入江三夫

[一般講演・講演者の方へ]

- 1) 使用できるスライドプロジェクターは2台です。
 - 2) スライドはすべて研究会開始20分前までに受付係にお渡し下さい。
 - 3) 演題・演者名など、不要なスライドのご使用はご遠慮して下さい。
 - 4) スライドカローセルは受付でお渡しします。
 - 5) 受付で必ずスライドの試写をお願いします。
 - 6) 一般講演の発表時間は8分（予鈴7分で青ランプ、終鈴8分で赤ランプ）、
討論時間は4分です。
 - 7) その他のお知らせ事項は当日受付で致します。
-

第16回歯科衛生研究会プログラム

日時 平成14年2月27日(水) 17時30分～18時40分
会場 日本歯科大学新潟歯学部 アイヴィホール
<講演時間8分、質疑応答時間4分>

[開会の辞] <17:30～17:35>

座長 相方 恭子 先生

<17:35～17:47>

1. ヒトの正中歯(過剰歯)の形態と組織構造について

新潟短期大学 ○高橋 正志
新潟歯学部・口外II 森 和久、又賀 泉
新潟歯学部・口解I 小林 寛

<17:47～17:59>

2. ヒヤリハット報告の分析—SHELモデルを用いて—

新潟歯学部附属病院・看護科 ○渋谷 トシ子、帆苺 初枝
田中 伸枝、小田 典子
新 道子
新潟歯学部附属病院・看護科長 藤井 一維

座長 坂井 由紀 先生

<17:59～18:11>

3. 口腔悪性腫瘍の治療における歯科衛生士の役割

新潟短期大学 ○茅野 慈、中村 直樹
新潟歯学部・口外 山口 晃
新潟歯学部附属病院・歯科衛生科 松木 奈美、片桐 智子
新 池田 裕子
新潟歯学部附属病院・看護科 杉木 道子

<18:11～18:23>

4. 歯科衛生士の力

—専攻生がおこなった歯周初期治療患者の症例報告とその評価—

新潟短期大学 ○小柳 真由美
新潟歯学部附属病院・総診3 佐藤 修一、新海 航一

<18:23～18:35>

5. 義歯清掃に関するアンケート調査

新潟短期大学 ○白井 かおり
新潟歯学部附属病院・総診1 水橋 亮、須永 一洋
宇野 清博

[閉会の辞] <18:35～18:40>

○高橋正志（新潟短大）、森 和久、又賀 泉
（新潟・口外II）、小林 寛（新潟・口解I）

○渋谷トシ子、帆 初枝、田中伸枝、小田典子、
杉木道子（附院・看護）、藤井一維（附院・
看護科長）

〔目的〕正中歯は最も出現頻度の高い過剰歯であり、多数の症例報告があるが、歯の形態と組織構造について詳細に検討したものはみられない。そこで、今回、10例の正中歯の形態と組織構造について詳細に検討し、これを形成した歯胚の由来について考察した。

〔材料と方法〕材料として、5～19歳の日本人にみられた10例の正中歯を使用した。パノラマX線写真を撮影後、正中歯を抜去し、ただちに10%中性ホルマリンで固定した。正中歯の表面形態を実体顕微鏡下で詳細に観察し、歯髄腔の形態を軟X線撮影装置(SOFRON)で観察した。その後、水平または唇舌側方向の研磨標本を作製し、偏光顕微鏡、位相差顕微鏡、蛍光顕微鏡、マイクロラジオグラフィで観察した。また、同一標本の研磨面およびエナメル質表面にほぼ平行な再研磨面を0.05 N HClで3分間腐蝕し、水洗、アルコール脱水し、臨界点乾燥したのち白金蒸着を施し、S-800型走査電顕（日立）で観察した。象牙質の形成面も同様にして走査電顕で観察した。

〔結果〕正中歯の歯冠形態は、円錐形、栓状形、切歯結節形、切歯形などに分類できた。湾曲徴、歯面徴と比較して、隅角徴が不明瞭な場合が多かった。正中歯では、歯頸部エナメル質のシュレーゲルの条紋の不明瞭な領域が上顎中切歯よりも広く、エナメル象牙境が波状になっていた。新産線のような特に石灰化度の低い成長線はみられず、上顎中切歯よりも矮小正中歯の方がエナメル質が厚かった。中層エナメル質の小柱断面の形態は上顎中切歯のものにきわめて類似したが、形態のゆがみの強い領域が点在していた。エナメル小柱の幅径の平均値は、正中歯で約7.0 μ m、上顎中切歯で約6.5 μ m、上顎側切歯で約6.0 μ mであった。象牙質の形成面の形態は上顎乳中切歯よりも代生歯に類似していた。

〔考察〕正中歯は、象牙質の形成面およびエナメル質の小柱鞘の特徴と新産線がみられない点から、永久歯群に属すると考えられる。矮小正中歯の歯冠の概形は円錐形で、正常上顎中切歯とはかなり異なるが、中層エナメル質の小柱断面の形態およびエナメル象牙境が波状を呈する点から、上顎中切歯を形成した歯胚の一部が完全分離し、不十分な成長空隙において矮小正中歯を形成した、と推察される。

〔はじめに〕医療事故防止は医療従事者にとって最重要と言っても過言ではない課題である。横浜市立大学の患者取り違い事故以来、社会の関心は一層高まっている。英国、小児外科医長マーク・デ・レバルは「私たちは率直にミス認めなければならない。これが医療事故をなくす唯一の道である。」と述べている。附属病院看護科教育委員会でも、「ヒヤリハット報告書」を義務づけ、組織での取り組みを強化した。これは、提出された事例を看護婦全体で共有化し対策を講ずることにより、事故を未然に防止する事を目的としたものである。今回、この報告書を集計し、その一部についてSHELモデルを用いて分析し考察した。

〔調査方法〕H12.1.1～H12.12.31に附属病院看護科へ提出された「ヒヤリハット報告書」を日本看護協会の医療事故防止マニュアルに基づいて事故の種類を分類し、最も多かった種類の中から事例を抽出し、SHELモデルを用い分析した。

〔結論〕ヒヤリハット報告をSHELモデルなどのツールを用いて分析することは、事故の要因を明らかにし、事故の防止策を講じることができる。また、ミスの多くは業務の煩雑さ、自己マニュアル化によって、照合、確認が不十分となって起こる。患者についての理解を深めることはフェイルセーフとなり、事故防止につながる。〔おわりに〕今後も分析を継続し、事故防止の対策を講じるとともに、アクシデント、インシデントを報告しやすい書式、環境、共有化するための組織での取り組みを改善、向上していく必要性を痛感した。

口腔悪性腫瘍の治療における歯科衛生士の役割

- 茅野 慈、中村直樹（新潟短大）、山口 晃
（新潟・口外）、松木奈美、片桐智子、池田裕子
（附院・歯衛）、杣木道子（附院・看護）

【はじめに】

口腔悪性腫瘍の治療は、外科的療法、放射線療法、化学療法を組み合わせた集学的治療が行われている。これらの治療は、副作用として口内炎を伴う事が多い。口内炎の予防としては口腔内の清潔・湿潤がケアの基本となる。現在、一般に口腔衛生は看護婦によって行われていることが多い。

今後は歯科衛生士による衛生指導および管理の機会が多くなると考えられる。そこで今回、歯肉癌患者の事例を通し、口腔悪性腫瘍治療に対して歯科衛生士がどのように関与できるか体験したのでその経過とともに若干の考察を加え発表する。

【症例】

患者：53歳、男性

初診：平成13年9月26日

主訴：左上6部の腫脹

現病歴：平成13年8月初旬に歯周疾患P4にてⅡの抜歯術処置を施行される。抜歯後、長期にわたる治癒不全を認めたため紹介来院した。

既往歴：10年前から糖尿病。現在内服加療中。

診断：左側上顎歯肉癌（T3N2M0）

治療経過：10月29日から放射線療法および化学療法を開始し11月27日に手術を施行した。術後は化学療法を2回行い、放射線療法も現在施行中である。

【考察】

糖尿病のコントロールも良好であり、重度の歯周疾患は認められなかった。軽度の口内炎の場合患者自身によるセルフケア、含嗽を行ってもらい歯科衛生士の方でチェックを繰り返した。重篤な口内炎になってくると痛みも増し、患者自身によるブラッシングも出来にくくなった。衛生士による口腔清掃も歯ブラシは使用できず、綿球で口腔内の消毒しか行なえなかったため、放射線性口内炎の予防・治療が難しいことを痛感した。また、治療に対する意欲も低下するため精神的なケアも必要であると考えられた。

歯科衛生士の1年専攻生がおこなった歯周初期治療患者の症例報告とその評価

- 小柳真由美（新潟短大）、佐藤修一、新海航一
（新潟・総診3）

歯周治療を行ううえで、よく考慮された治療計画の立案はきわめて重要である。計画された歯周治療を効率よく実行するためには、その治療計画を歯科衛生士が理解し、実践していくことが必要であり、それが治療成功の鍵となる。そのなかでの歯科衛生士の役割は、歯周組織診査やモチベーション、ブラッシング指導、スケーリング・ルートプレーニングなど歯周初期治療に関することが中心である。

歯科衛生士の業務は、〈歯科予防処置〉〈歯科診療補助〉〈歯科保健指導〉の3本の柱で成立し、歯科衛生士試験に合格して厚生大臣免許を受けた者が、この業務を歯科医師の直接の指導の下に行うことができる。当短期大学では、歯科衛生士の卒後研修を目的に専攻科が開設し、さらなる専門知識と技術の向上を図ってきた。卒後研修において、平成6年度から附属病院歯周治療科コースが開設され、現在までに16名が終了している。

歯科衛生士の役割が重要視されてきた今、歯科衛生士の行なう歯周初期治療はどれだけの効果を上げているのだろうか。このことについて、歯科衛生士1年目である自らが、この1年間に担当した初期治療患者のデータを評価・考察し、そのなかから1名の患者について症例報告する。

key word: 歯周初期治療、歯科衛生士1年目、症例報告

義歯清掃に関するアンケート調査

○白井かおり（新潟短大）、水橋 亮、須永一洋、
宇野清博（新潟・総診1）

【目的】

急速に進む高齢化社会において、義歯装着者は増加する傾向にある。義歯装着の目的は喪失した歯とその周囲組織を形態的、機能的に回復することであり、装着した義歯が周囲組織に悪影響を与えることなく、口腔諸組織と調和することが必要となる。しかし、義歯の装着に伴い口腔環境が悪化しやすい傾向がある。その原因の一つとして、残存歯や義歯へのプラーク付着が考えられる。そのため、デンチャープラークコントロールが重要となる。

そこで今回、義歯装着者が義歯の清掃についてどのように認識、実行しているのかを把握することによって、より適切な清掃指導を行うことを目的として、義歯の清掃に関するアンケート調査を行った。

【対象・方法】

調査は平成14年1月21日から29日に日本歯科大学新潟歯学部附属病院総合診療科1に来院し、本院で義歯を作製、装着している患者を対象とした。

方法としては、患者に義歯の清掃についての認識、清掃の方法、および清掃指導を受けてきたかなどに関して直接聞き取り調査を実施した。

【結果】

「義歯の清掃に気をつけている方だと思う」と回答した者はおよそ80%であった。また、デンチャープラークの為害性（口臭の原因・残存歯や歯肉への悪影響）についても多数の者が認識していた。

1日の義歯清掃の回数は、50%の者が3回以上と回答していた。

清掃方法については、多数の者が普通の歯ブラシによる機械的清掃と義歯洗浄剤による化学的清掃を行っていた。女性では歯磨剤を併用すると回答した者も多く見られた。義歯洗浄剤については、約50%の者が毎日使用すると回答していた。

「これまでに義歯の清掃について説明を受けた」と回答した者は約40%であり、それらのうちの90%が解りやすく十分な説明だったと回答していた。また、「説明を受けていない」と回答した者のうち約60%は説明を受けたいと回答していた。

次回の「歯科衛生研究会」は平成14年7月中旬（水曜日）に開催される予定です。

多数の演題の申し込みをお待ちしております。
